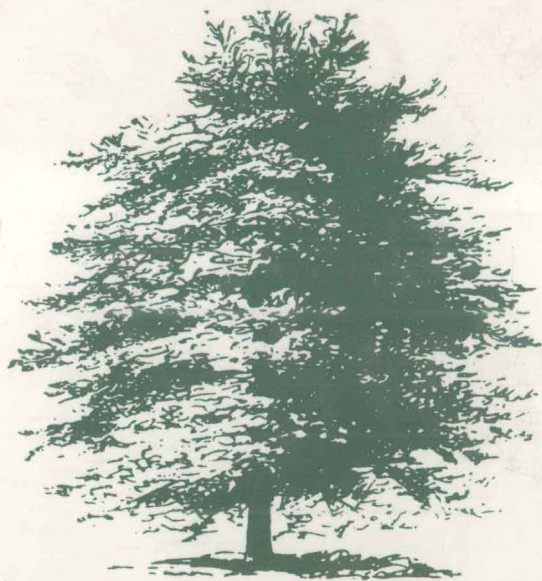


アリス!
牧場の父親日記
藤門 弘



ARIS

平凡社

アリス!

牧場の父親日記

藤門 弘



ARIS

平凡社

H54998

藤門 弘 (ふじかど ひろし)

1946年、中国上海に生まれる。立教大学卒業。早稲田大学中退。アリス・ファーム代表。家具作家。主な著書『アンクル・アーサー野を駆ける』(クロスロード),『カントリーライフのすすめ』(講談社),『カントリーライフ讃歌』(講談社),『カントリーライフ・テキストブック』全4巻(山と溪谷社), 翻訳『完全版自給自足の本』(文化出版局) ほか。

アリス・／——牧場の父親日記

1988年10月20日 初版第1刷発行

定 価 1200 円

著 者 藤門 弘

発行者 下中直也

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区三番町5番地

郵便番号 102 振替 東京 8-29639

電話 東京 (03) 265-0475 [編集]

(03) 265-0455 [営業]

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社石津製本所

©Hiroshi Fujikado 1988 Printed in Japan

ISBN 4-582-82367-X

乱丁・落丁本のお取替えは直接読者サービス係まで
お送り下さい(送料は小社で負担します)

アリス！牧場の父親日記 目次

有巢からアリスへ

相棒と出会う

飛驒の山中で

老詩人と「有巢」の誕生

有巢、最初の四季

車は走る、ぼくも走る

保育園たらい回しのころ

ハッピーバースデーのひとり旅

熱烈密着生活のスタート

少年のふたつの季節

1986 夏

有巢少年五歳の大工道具／ベストファーザー「イエローリボン賞」受賞のてんまつ

水中メガネの風呂潜り／有巢と啓太の夏休み

1986 秋

『大草原の小さな家』はやっぱりすごい／熊を撃ち殺してはいけないのだよ、有巢

82

64

63

56

49

41

33

26

20

12

6

5

1986 冬

雪の中でメリークリスマス／有巢少年「ハロー、ジョン」と言う／ギンザンマシコの日曜日

1987 春

有巢、スキーで歩こう／テレビについてちよっと／果樹を植える

1987 夏

東京デパート少年はかわいそう／北の島 悲劇のキャンプ／犬と子供

1987 秋

「小ブナ釣りしかの川」の話／紅葉はいいね、やっぱり／雪が好きかい？ 有巢

1987 冬

南の海で……／有巢の旅／有巢の手紙

1988 春

猛父三遷の学校選び／まずはめでたき入学式／入学式に震えたお父さん

1988 夏

次の三年に向かって

わが名は「父親」

父親対談

椎名 誠・藤門 弘

母親対談

宇土 卷子・藤門 弘

あとがき

装幀

三村 淳

写真

美濃英則

三浦敏幸

有巢からアリスへ

相棒と出会う

一九七三年の秋、インドの路上で、彼女と初めて会った。

ニューデリーの歩道の端に、久びさに見る日本女性が三人座っていた。

この方面の人びとは道路でも駅でも、どこでもすぐに座ってしまうから、それはさほどもずらしい姿ではなかったが、三人の足がむやみと白く感じられた。

ヒマラヤ登山の三ヶ月とその準備で、日本を出てからもう半年が過ぎていた。色の黒い人ばかりと付き合ってきて、最後にはネパール王家の少女に半ば本気でプロポーズしたりした。だから、日本女性独特の肌の色は大いに新鮮だった。

三人が座っていたのはYMCAの出入口のあたりだった。ぼくはこの施設の角すみにある「ホステル」というところに滞在していた。合宿所のような建物で、薄暗くてガランとした部屋にベッドがたくさん並んでいた。たしか一泊二、三百円だったと思う。

ぼくはヒマラヤ登山でかなり消耗していた。体重も減っていたし、緊張感がほじめて少しも

のうい気分だった。まるで激戦を終えた復員兵みたいだな、と思いながら毎日ダラダラと、食って寝るだけの日を送っていた。

ネパールの首都カトマンズで、遠征隊の後始末を終えて、インド平原に下ったのだが、もう少し充電が必要な気がした。カトマンズで日本の文庫本を大量に手に入れていたので、それを読みながら毎日Y M C Aのベッドにひっくりかえっていた。

ある日、明るい光が差しこむ入口に、ひとりの男が逆光で立った。ぼくは寝ころがったままぼんやり彼を見ていた。室内に目が慣れると男はいちばん端のベッドに行き、リュックを降ろしてかき回しはじめた。そしていきなりマットレスを起こして、粉の殺虫剤を撒きはじめた。男を眺めながら、なるほど、とぼくは思った。彼は間違いなく日本人、旅慣れているように素人、年は若い、そう見てとった。

インドに来て以来、なんだかワケのわからない早口の英語をしゃべる人びとに苦戦していたぼくは、有利な形勢で付き合えそうな相手を発見して内心よろこんだ。

日本語で話しかけると、彼はびっくりして殺虫剤撒布作業を中断し、こちらを見た。なんだ、日本の人なのかあ、と間の抜けた声で言った。そのベッドの隣人は気むずかしいドイツ人だから、ぼくの隣の空きベッドにおいて、ただし殺虫剤はいらないよ、そう教えてあげた。

彼はぼくの言うとおりに素直に従い、それから少しずつ話をはじめた。近くで見ると、彼がかなり若いことがわかった。

予想どおりの有利な展開でふたりの位置関係が定まりかかったとき、彼は思いがけないことを言った。

「オレ、女三人連れてんだよな」

びっくりした。その「女」というのはどういう人たちなの、ととたんに姿勢を低くしてぼくはたずねた。ふたりの立場はいっぺんに逆転した。

彼は時計を見て、彼女たちがやってくるころだと言う。女性たちは近くのYWCAに泊るところになっていて、玄関で落ち合う予定なのだそうだ。

「いっしょに何か食べに行こうよ」

彼が言うと、ぼくは先ほどまでの怠惰な姿勢を一気に改めて、あわてて服を着た。

玄関先の道路に彼女たちがいた。木陰を選んでぼんやり座り、黙って行きかう人や車を眺めている。眺められる視線のほうが圧倒的に多いのに気づいていないみたいだった。

「この人、日本の人、部屋いっしょなんだ」

彼は相変わらぬのだらしい声で、一応紹介らしきことをした。

三人の女性は立ち上がってぼくを見た。日焼けした精悍な姿をまぶしそうに眺める、というほどのことではなかったが、一応の関心を示してくれたみたいだった。超異国の世界で同胞の、それも女性に会うというのはいいいものだな、しかしそれにしても、日本の女性は背が低いなあ、そんなことをぼくは思った。

四人組といっしょに、歩いて近くのレストランへ行った。そこはハンバーガーが食べられる店で、菜食主義に従えない墮落したヒッピーたちが集まる店だった。だからいつも非常に混んでいた。

四人のために、急速にマスターしつづつあったインド的英語で食べ物を注文してあげた。それから彼らのことをいろいろと聞きはじめた。

女性は三人とも大学生だった。外語大ふたり、学習院ひとりのこの三人は、特別親しい間柄ではないことがわかった。そして見た目よりもずっと旅に臆病になっているらしい。

日本を出て二週間、カトマンズから汽車でニューデリーまで来たのだそう。その間にずいぶんいろんな目に遭ったらしい。

フムフム、と聞きながら、ぼくは突然消息通を装い、思いつきのいい加減なアドバイスをした。ついでにヒマラヤ登山の冒険談など披瀝し、最後にハシシの正しい吸引法まで講義した。わずかの間に、ぼくはこの急造グループのリーダー格となり、師と仰がれる立場になった。久しぶりの日本人と日本語、それも女性が三人もいて、大いに贅沢であった。

翌日もまた同じレストランで食事をした。

「アフガン方面に行きたいんですけど、いっしょに連れてってくれませんか」
彼女たちにそう言われた。

「ぼくはひとりでシルクロードをずっと西のほうまで行くつもりなのです。これはぼくの長年

の夢だし、かなり厳しい旅になると思うんですね」

「私たちががんばりますから、ぜひ」

「うーん、困ったなあ」

困ったフリをしながら、ぼくはもうすっかりその誘いにのっていた。

一週間ほどしてから、ぼくが加わった五人組はボロボロのヒッピーバスに乗りこんだ。英国まで一ヶ月、一人百ドルの乗車賃だった。世界各国の若者が二十人ほどの団体になって、西へ西への旅がはじまった。沈む夕日を追いかける地上の移動は荒涼とした風景を這い進むもので、大いに魅力的だった。

もっとも、カイバール峠を越えてアフガンにはいったころ、五人組の関係が少しずつ微妙になってきた。YMCAで会った男はもともと外語大のひとりとカップルだった。残るふたりの女性のうち外語大の女性とぼくは親しくなり、すると学習院がとり残される格好になってしまった。

カブールで、反対方向から来た日本人グループに頼んで彼女をインドまで送ってもらうことにした。殺風景なカブールの街で、じゃあね、と学習院と別れた。ついでにふた組のカップルも別行動をすることになり、ぼくはとうとう女性とふたりの旅をすることになった。

少しとまどいながら、再び怪し気なヒッピーバスに乗りこんだ。ふたりだけになると彼女は

よく話すようになった。ジャズと映画と本に詳しい彼女は、話し相手として魅力的だった。ボクシングの歴代チャンピオンを全部記憶していたりするこの女性に、ぼくは驚きながら少しずつ魅かれていった。

イランからトルコにはいつて、イスタンブールに着いた。この街に興奮したぼくたちは、ヒッピーバスを降りてしばらくここに滞在した。そしてややためらったあと、さらに西に進むことにして東欧からイタリア、フランスまで行った。

パリを終点にすることにして、わりあい長いあいだこの古い街にとどまった。しかし、石造りの西欧の街は寒くて、心まで冷えびえとしてしまいそうだった。年を越して彼女の誕生日を祝い、それからぼくたちはまたインドに向かった。

再びインドに帰り着いたころ、彼女との距離は出発のときには予想もしなかったほど近いものになっていた。言葉の通じない国ぐにを、いろいろな体験をしながら旅をして、ふたりでそのあれこれを面白おかしく話し合うことで自分のものにしていった。ひとりだったらかなり辛かったろう出来事も、パートナーがいることで全然別な性質のものになった。

コンノートプレスにあった野外喫茶店に毎日長い間座りこみ、切れぎれに彼女と話を続けた。そしてある日、彼女とぼくはふたりの旅を別な形で続けることに決めた。

彼女、宇土卷子は、こうしてぼくの相棒になった。

飛驒の山中で

インドの大きくて深い空、野蛮に輝く太陽の下で、まなじりを決して宣言した。

「よし、日本に帰って田舎で暮らそう。山の中で、何もかも最初からはじめなおすのだ！」
すべてがゆったりのんびりと、ほどけきってしまったインド世界で、ぼくたちの大げさな決意はいささか宙を空転したきらいがあったが、ふたりはあくまでまじめであった。

言葉を肉体化するのだ、とか、そもそも西欧型文明は……とか、なんだかあれこれ面倒なことをたくさん言っていたみたいだが、今になってみるとそういう大上段の構えかたは、ひたすら懐しいだけのことに見える。

ただ、ひとつだけはっきり言えるのは、「情報」の中で田舎へ行くことを決めたのではない、ということだ。今思い返してみても自信がもてるのは、インドの空の下でまったく独自にそれを決めた、ということだ。

七四年の春、ぼくたちは旅の続きのまま飛驒の山中に飛びこんでいった。

農家の納屋を借りて、ヒマラヤ遠征隊支給の金属トランクをその中央にドスンと置いた。これを食卓に任命することで新しい生活がスタートした。

インドで決めたとおり、ぼくは家具、宇土卷子は機織りの勉強をはじめた。後に「カントリライフ」がブームになって、この家具＋機織りがなんだか非常にはやったみたいだ。自分たちの出発のスタイルが、平凡に墮した気がして、実はあまりうれしくない。

それはともかく、最初のころは猛烈に忙しく、大いに楽しい毎日を過ごした。家具と織りはもちろん、生まれて初めての畑仕事も大工の手伝いも、近くの農家の人を先生にしてもかくよく働いた。着る服は作業着のみ、読む本は技術書だけ、九百八十円以上のものは買わない、などというとり決めにチョークで書いた。

ついでに有り金全部を画鋏で壁に並べて貼り、家計のようすは壁を見れば一目でわかるようにした。

「モノに対する四原則＝作る、拾う、もらう、かっぱらう」という壁の標語を見て、近所のオバさんは夜になると盆栽をしまうようになった。

田舎暮らし三年目に、念願の家づくりをはじめた。仕事の合間にやったので、それは完成までに一年もかかったが、七十万円にしては上出来の家になった。

家の完成直後に、ぼくはアメリカに旅に出た。アメリカを車で一周してから、宇土卷子と再び合流した。厳しい冬をひとり越えて、彼女はずいぶんたくましくなったように見えた。久

しぶりに彼女と会って積もる話をしているうちに、ぼくたちは田舎暮らしの第一段階が終わったことに気づきはじめた。

思いきってもうひと飛び、と相談していると、理想的な廃村を山奥に発見した。そこは谷間にひらけた小さな村で、まだ何軒かは残っていたが、廃村と言ってさしつかえないようなところだった。有巢、二俣、中野という三つの部落があったのが、人がほとんどいなくなってしまうので、各部落の一字ずつをとって「巢野俣」という地名になっていた。

ぼくたちが空き農家六軒をまとめて借りたのは旧有巢部落だった。有巢橋を渡った川の対岸にあって、そこだけ別天地のように見えた。なにより、この「有巢」という地名が気に入った。

古いけれど非常に立派な農家に暮らしながら、夜になるとぼくたちは相変わらず話ばかりしていた。しかし、旅のように刺激が外側から毎日やってくるわけではなく、また田舎暮らしのごく最初のころのように新鮮な発見が連続するわけでもない。だから少し辛い時期だったのだと思う。結構シリアスな議論が多かったように思う。

宇土巻子は「女性の自立」というようなことをずっと言っていた。

「ウーマンリブ？ いいじゃないか。だってそれ、女がやるんだろ」

冷やかしながら、でもぼくは彼女の主義主張が少しは形になるように努めた。日常のあちこちにぼくに対する不満があったのだろうが、ぼくとしてはできるだけのことはしているつもり